

—随想— 大学教授論

この拙文を教えを頂いた今は亡き諸先生に捧ぐ

後 藤 秀 雄

はしがき

筆者は本年3月愛知学泉大学経営学部の教授を定年退官し、名古屋工業大学で24年2ヶ月、愛知学泉大学で10年、計34年2ヶ月に亘る教授の肩書をとった時、自由の歓びと身の軽さを感じると共に、一度はこのテーマで筆をとる夢の日が得られた気持で満ちている。よって老書生の反省の姿として御一読賜れば幸甚である。

1. 大学教授への憧れ

明治維新の達成と共に西欧特にドイツ、フランス及びイギリスの近代文明の驚異的發展を眼にした明治政府の重臣は、外国人教師の雇用と共に多くの留学生を派遣し近代科学の吸収に努めたことは良く知られる事実である。これが為に、当時の青少年は大きな夢を抱き所謂近代学の勉強に励んだ。この頃良く用いられた言葉に「末は博士か大臣か」というものが存在する。この中で博士とは当時の帝国大学教授を意味し、また大臣は近代日本の針路を担う政治家を意味している。この言葉が当時青少年の心を最も強くとらえたのは日露戦争の終わった明治37、8年頃と推定される。この時代に至ると日本にも漸く立身出世主義の空しさの思想が漂い—高生藤村操の“人生將た如何”

の自殺事件や同じ頃書かれた倉田百三の「出家とその弟子」は若い青少年に虚無感を与えたと云われている。明治を終え、大正に入ったこの時期より宮本和吉、安部能成、天野貞祐により西洋哲学が紹介され岩波書店の出版と共に人生を深く考える段階に到達したようである。それと共に帝国大学教授の外に多くの高校、高工、高商及び高農が日本資本主義の発達と共に設置され、教授、助教授、助手の階層によって西欧科学の紹介、普及に努めたが、その道は決して安易ではなかった。即ちこれらの学校の教授の地位を獲得するには先ず大地主の資産家の子弟に育ち小学校、旧制中学で抜群の成績をとり、時には10年に1人の神童と呼ばれ、それから旧制一高、三高の様なナンバースクールに入学し、更に専攻する帝国大学で優秀な成績をとることを前提としている。

不幸にしてこの道に破れた人は大学をあきらめ当時新設された高等専門学校の教授に転進し次の機会をうかがったのである。

幸にして専攻する分野の帝国大学を優秀な成績で卒業してその大学に残ってもいきなり教授ということはあり得ず助手という忍従^{ジョテ}の生活を辿らざるを得ない。そして助手から講師、助教授となるまでにドイツ、イギリス、フランスの大学又は研究所に留学し、その間に英仏独の3ヵ国語で専門の論文を書ける能力を必要とされる。端的に言って現在東大、京大等を定年で退職された夫々の分野の泰斗と呼ばれる人々は、戦前横浜、神戸より一ヶ月の船旅を経てマルセイユまたはロンドンに着き、2年乃至3年の質素な留學生活の経験を持つ人がきわめて多い。筆者はそのような逸話を聞く度に現代の航空機の有難さをしみじみと感じている。

さてそうした青春と凡そかけ離れた留學生活を経ても教授への道は決して容易でない。即ち助手生活への復帰と学位獲得競争と学会に於ける発表論文の評価競争である。これは大学の卒業年次に無関係で文字通り全世界の学会からの評価がポイントとなる。

筆者は先年新聞の訃報欄に京大教養部教授田村松平博士の死亡を知った。田村博士はノーベル賞の湯川博士の2年先輩であるにも拘らず湯川博士に教

授の地位をとられ晩年はさびしい日々を過されたと聞く。

こうして眺めると現在官僚のトップといわれる大蔵省の事務次官と比べて遙かに帝国大学教授への道はきびしいのではないか。

そしてその給与はきわめて恵まれず「大学教授が死亡したとき丸善にある借金の額によってその偉大さが計られる」と云われる程研究、図書に人生のすべてを捧げた先生が少なくない。

こうして帝国大学教授またはそれに類する東京工大などの旧制大学の教授となった人々の学問に対する情熱と迫力はすさまじいの言葉で表現された。筆者は名高工の在学中の昭和18年（1943年）学校の文化講演として当時勢力経済を主張していた京都帝国大学教授高田保馬博士と歯車理論の世界的権威と知られた東北帝国大学教授成瀬政男博士の話を聞いたことがある。その時両博士の学問に対する情熱に圧倒され、帝国大学教授のそのスケールの大きさに感動したものである。それは当時の帝国大学教授が1つの学科における1つの専門分野と教育分野に責任を持つ講座制に守られ、伝統を維持する役割を果たしていた為にこうした気品が自らに身についたのではなかろうか。そうした反面彼等教授には1つの大きな悩みが存在していたようである。それは若くして恩師によって1つの専門分野に押しこめられ専門分野に近い花形分野への興味及び研究が全然許されないからである。筆者は嘗つて10年程前東大計数工学科の教授をされていた近藤一夫博士が、東大航空工学の卒業であるに拘らず流体力学その他の分野で物理学の相対性理論と同一形式をとり、最後は非リーマン幾何学を力学系に適用されているのをみて東大理学部某教授に酒宴の席上「生れた時代の相違によるひがみ」と批判したことがある。これを聞きつけた同教授から丁寧な手紙を頂いたことがある。そこには生れた時期によって花形の学問へ向うことの難しさを述べられていた。

さて帝国大学教授の講義の威容さを今1度記しておこう。これは筆者が岐阜大学名誉教授で昭和9年京大哲学科を卒業された玉井茂教授から直接耳にした逸話である。玉井教授は西田幾多郎及び田辺元博士が京大に在職された京大哲学の全盛期に在学された。その時例えば西田博士の特別講義が1ヵ月

前から予告されると田辺博士は勿論西田哲学の門下生高山岩男、高坂正顕以下の哲学者さらに末川博博士などの立命館、同志社の教授連中が静かに席についた教室の中で和服を着た西田博士が教壇を往復し、一言一言瞑想に耽りつつ西田哲学の真髓を語られたとの事である。

その光景は一幅の絵であり荘厳なる劇であると語られた。筆者はこの玉井教授の話の思い出すと共に哲学又は学問の良き時代を思い浮べるのである。

筆者はこの感激に満ちた話を伺ってから2～3年後、京都大学の理論物理学研究所で湯川秀樹博士より非局所場理論 (Non Local Field Theory) について西田博士の講義の再現を体験することができた。それは学問に対す講義という物は肯定された結論をうまく説明するのではなく、肯定の過程の中に「そうでないかも知れない」という否定を含めて述べるべきだということである。筆者はこの西田、湯川両博士の挿話を聞いたのは筆者の30才代前半であった。それ以来この手法を講義に用いようとして果せず教授生活を終った。これは今尚筆者の脳裏に残る悔恨である。

今まで筆者は明治大正及び昭和前半期までの日本の学制に存在した帝国大学時代の教授を美化し続けて述べてきた。

よって今日の新制大学に於ける教授像に就いて以下述べよう。

2. 新制大学の発足と教授の役割

周知の様にわが国は昭和20年(1945年)8月15日太平洋戦争に敗れ、同年8月末よりマッカーサーをトップとする連合軍最高司令部即ち所謂G.H.Q.の管理下におかれた。この占領軍は大半がアメリカ軍人によって占められ、皇国史観に基づく軍国主義国家であった日本を民主主義国家に移行するため次々と日本政府を通して指令が出された。

これらの指令は戦敗国として実施しなければならない絶対性を有していた。そうした指令の中で我々日本の教育者を驚かしたのは昭和22年(1947年)指令された6・3・3・4の学制改革であった。それは明治政府が国民の絶対義

務の1つとした教育制度を2年間の短期間で改革せよという指令であった。即ちそれまで6ヵ年の義務教育の小学校教育に5年間の中学校・工業学校のような中等学校制度、さらに3年間の旧制高等専門学校制度、そしてその上に最終の学校として3年乃至4年の大学制度が明治の中期より日本に於いてはそれ程大きな短所を挙げることなく実施されてきた。

そうした学校教育制度を、僅か2ヵ年で6年間の小学校の義務教育にさらに3年間の新制中学の義務教育、それから自由に3年間の新制高校教育を最後の新制大学の入学準備のためにするという言葉で述べれば単純な学制である。恐らく平和時であるならばその根本理念から財政支出に関連してその実施迄には10年間を必要とするであろう。それが僅か2ヵ年で実施したことは占領軍の権力の威大さを示したといえよう。当時筆者は岐阜市外の一寒村に住居していたため、新制中学校の校地買収、旧陸軍兵舎の移築によるバラックに似た中学校舎の建築の実態を現実に見てきただけに、日本人の適応力の良さに驚いた。こうしたハード面は何とかしても教育内容のソフト面は仲々難しかったようである。我が国の教員の資格は一括して文部省の下で資格面が定められていた。中学、高校と新制度では従来の制度を適用出来ない1年づつの増加分がある。よって新しい中学の教官は小学校の先生であった人々に休暇を利用して補習授業の習得によって資格を与え、新制高校の先生になる人も旧制中学の老先生に補習授業によって資格を与えたのである。恐らく今日ではこうした急場しのぎは不可能であろう。現内閣は教育改革を1つの旗印にしているが筆者は最も困難であろうと判断している。昭和22年に新制中学、昭和23年に新制高校を発足させ、6・3・3・4の新学制も昭和24年最終局面に到達した。

この昭和24年（1949年）4月から発足することとなった新制大学は多くの難問題をかかえていた。

その1つは旧制帝国大学などの総合大学及び単科大学はそのまま新制大学への移行は簡単に決定されたが、残った旧制高校、旧制工専、経専及び農専などの旧制高等専門学校をどうするかという事であった。特に明治以来感受

性の強い青春期に人生観を構成し青春を謳歌した3ヵ年の旧制高校生活を送った経験を有する安部能成、天野貞祐等の当時の日本の第一級の知識人はこの旧制高校の存続を強く主張した。然し旧制大学の一般教育を担当することに結着した。残るは旧制高専の処理でそれらは昭和20年に於ける米軍B29の空襲によって大方の設備、校舎が破壊されていた。そこで旧制専門学校の卒業生及び在学生によって大学昇格期成同盟会が組織され寄付金の募集、校地の確保、標準の図書数の確保、教官陣営の補強を行ない昭和23年までに新制大学の設置基準に到達する努力が行なわれた。

この中で最も困難を窮めたのは当時アメリカの一部の州のみで実施されていた Liberal arts に倣った一般教育の教官の充足と専門教育の教官の整備であった。一般教育とは旧制度の日本の高等教育では皆無であった社会、人文科学例えば哲学、心理学及び統計学、経済学、法学等の分野の教官の充足を意味した。兎もすれば従来の日本の教育が専門馬鹿の狭い領域になり易い愚を戒め広い分野に教養を持つ所謂文化人養成を旨とした為ある意味に於いては画期的であった。

然し最近における大学教育の改革ではこの構想が碎かれ再び昔の教育の方向に回帰しつつあることは当時を知る者にとっては残念の極みである。そうした新制大学としての設置基準が極めて厳しい物であった上に、講座制でなく開講予定の学科目に対する教授、助教授、助手に対する教官の適格性のうち担当の教授の適格条件は

1. 学位を有する者
2. 学位に相当する研究業績を持つ者
3. 専門分野で優れた賞を受けた者
4. 高等専門学校で長期間担当の経験を有する者

とされていた。当時筆者が勤務していた岐阜工業専門学校に於いては前述の条件に該当する教官は皆無であり、当時歴史と伝統を誇った名古屋工業専門学校に於いても学位所有者は校長を含めて3名か4名であった。その結果岐阜工専より早く審査を受けた名工専では殆んどの工専時代の教授経験者が助

教授または講師と判定された。

この結果を知っていた為か昭和24年初頭審査結果を受けた筆者の勤務先は暗いムードに包まれた。この結果を予想してかこの先年迄岐阜工専の大学昇格に情熱を燃やしていた河出修一教授は、昭和23年新設の新制高校長に転任され学園を去られた。その折筆者等若い教官を集め、「これからは私達老骨の出る幕ではない。皆さんは若いから希望を持ってしっかりと基礎の分野から勉強して欲しい」と激励して去られた。筆者は今尚この言葉を忘れていない。筆者はその翌日から当時京都大学教授で理論流体力学の第1人者の友近晋博士及び東大教授今井功博士に指導を受け、理論流体力学の Grunde の書物として良く知られていた Lab の “Hydnodynamics” を第1頁より勉強を始めた。今から思えば河出教授の言葉は旧制大学の研究室に残って栄光の教授の道を歩んでいた学者と同様の苦難の道を歩むことこそ、新制大学の支えとなる教授への道と教えられていたような気がする。

この筆者の決意は新制大学では卒業後日尚浅い為に助手と判定されたが、岐阜工専時代機械工学科に属していたが当時の工学部長の了解をとり物理教室の1人となった。

然し旧制大学と異って新制大学は学問一筋に歩むことは仲々出来ず所謂教育面に関連して学校行政の雑務を負わされる事が極めて多い。そうした繁務と斗い時には理論屋特有の徹夜の計算を経て論文を書き、昭和27年（1952年）4月国立岐阜大学に移管される共に、文部省より応用物理学、力学に関する助教授の判定を頂いた。時に筆者は28才であった。

昭和28年（1953年）国立岐阜大学工学部の助教授となった筆者は、新制大学の第1回の卒業生を社会に送り出し若干順調な研究生活を実施していたが、旧制大学の研究員として残っていた人々と異なった所謂学位に対する野望を寸分も持っていなかった。それは旧制大学の出身者でなかった履歴上の弱点もあったが恩師にしばられて自分の好む分野に進み得ない同年代の研究者の苦悩を眺める余裕があったからである。

そこで筆者は友近、今井両博士の指導を受けつつも理論流体力学が所謂古

典物理学 (Classical physics) で若干その内容に不満を感じていたのも、現代物理学 (Modern physics) といわれた量子力学さらにゴム状弾性論に興味を惹かれた。それが為に名古屋大学教授の坂田昌一博士のゼミナールに週1回参加し理論物理学の研究に燃える若い人々のグループに投じた。更に当時の工学部の教育組織の変更により繊維工学科に籍を置き所謂レオロジー及び当時の紡績工程の花形課題であったドラフト理論の研究を始めた。

旧制大学の若手研究者の様に1つの専門分野に固定され学位獲得の道へ一路邁進するのと異って自由な空気に包まれた新制大学の環境は筆者には最適であった。唯第3者から見れば学者栄進の進み方としては全く異端の方法としか眼に映らなかったのは事実である。

幸にも1953年イギリスで百年の歴史を持つ Textile Institute の Journal に日本人初の論文として投稿したところ掲載され、当時ドラフト理論に於いて Gotos' Equation として認められるに至った。この論文は繊維集合体の流れの場を定常的に取り扱いむらの生ずる非定常の場合は流体力学と確率過程を併用して本人としては自信に満ちた論文を、それまでの物理的取扱いを主軸として完成させた。然しこの当時筆者は深刻な悩みをかかえていた。それは昭和37年(1962年)3月末日を以て従来存在していた論文学位制度が打ち切られるという厳然たる事実であった。旧制の名古屋高工を卒業して以来自己の好みに任せて研究を続けて来た筆者にとっては、旧制大学の学閥に属し1年~2年の内地留学をして学位をくれる教授に屈するということは自我の強い筆者にとっては堪え難い屈辱であった。小生より年長で共同研究者であった旧制大学出身者は、この学閥を利用しいとも簡単に工学博士の学位を昭和33年(1958年)に獲得している。筆者はこの時悪態をつき“学位なんてインチキだ”と学内に触れ廻った。その時東京工大を定年退職し岐阜大学工学部に3年間来任された当時の日本の繊維工学の最高峰の1人であった内田豊作博士は、筆者を自らの研究室に招き「学位についての悪口雑言は学位をとってから発言するものだ。そして大学教授の職は与えられるものでなく勝ち取るものだ」とさとされた。筆者はこの忠言に耳を傾け学位取得に努力し

た。幸にも昭和35年京都大学工学部長であった藤野清久博士より学位論文の草稿を書く様に云われ、昭和37年3月京都大学より工学博士の学位を受けることが出来た。

藤野博士は日本の材料力学の祖と云われた松村鶴三博士を岳父にもち、学閥にとらわれない自由を旨とする大学者であった。然も筆者の学位論文の主査は藤野博士、副査は当時繊維化学者として著明な桜田一郎博士、いま1人の副査は日本の高分子物理学の開祖と云われた堀尾正雄博士で、当時の京都大学工学部の重鎮教授達であった。

筆者はこの学位獲得を契機として昭和37年4月、母校の名古屋工業大学の新設された許りの計測工学科に転勤し自動制御理論及びシステム工学の理論研究に精進することとなった。

以後は新制大学創立の学問の自由、専門のみに制限されない自分で好む分野へ精進することこそ現代の自然科学研究者の在り方と信じ、教室もその空気で指導して来た。

それは旧制大学出身者の学閥を守り狭い分野の徒弟制の空気に強い抵抗を感じ、自由なる学問の選択こそ王道と信じて来た筆者の51年余の体験に基づくものである。

むすび

筆者は過去51年余理工学分野の研究者、教育者としての生活を送ってきた。然し筆者の1側面は花鳥風月を愛する古い型の日本人であることを示している。従って人間であること、喜怒哀楽を持たない人間を誰よりも嫌ってきた。

そうした事を信条として明治大正の旧制高校のバンカラ風潮を愛し、この濃尾の山野に生れ散った亡き偉人に哀歓を抱いてきた。それが新制大学の教授としての1つの生き方と今尚信じている。筆者は嘗つて最も尊敬していた元名工大学長佐藤知雄博士よりアメリカの大学に「大学とは代々伝えられた人類の知的財産をより大きく発展させ次の世代に伝える所だ」の意味の碑が

校門にあると教えられた。筆者はこの一言こそ今日大学に籍をおく学長，教授の心すべき言葉と信じている。これが私の大学の教授生活より得た最後の助言である。